

歴史よもやま話 その9

茶の湯御政道

茶道（茶の湯）は総合芸術だという人がいる。和風建築の粋を集めた茶室、作庭技術の結晶である露地、床の間に掛かる掛け軸・花生け、炉にたぎる茶釜、抹茶茶碗、棗（茶入れ）など芸術作品の数々がある。さらには後に懐石と称される和風料理も含まれる。

そして茶室を舞台に演出し、自ら主役を務めるのが茶堂（茶頭）である。

茶の湯にたずさわる茶人（数寄者）、茶頭が、時の政権と深く係わった時代がある。織田信長や豊臣秀吉などが活躍した安土桃山時代、**茶湯御政道**といわれ、信長のアイデアだった。

茶人として最も有名なのは千利休で、他に武野紹鴎、今井宗久、津田宗及、神屋宗湛などが挙げられ、彼らは堺や博多の豪商であった。さらには古田織部、小堀遠州など徳川家康幕下の武将・官僚が挙げられる。

信長は三好一族や松永久秀らを攻略し、上洛を果たしたのち、当時茶の湯に親しんでいた堺の商人に近づき、名物狩や茶会など通じて、商人たちが持っていた財力や軍需物資（鉄砲や火薬）の調達力を利用した。武功のあった家臣に領地を与える代わりに、肩衝や茶入れ、掛け軸など、名物狩で得た室町時代からの唐渡り名物を与えこれが数万石の領地に匹敵するとした。また、家臣の武将たちに茶会を開くことを許可制にして、自らの政権の権威を高め、家臣の忠誠心を高めることに利用した。

信長や秀吉が「茶の湯御政道」を実践する様子が茶会記のなかに記録されている。

信長は京都・妙覚寺、相国寺で茶会を催し、美濃（稲葉山城）では、次男・信雄など一族の者達を動員して、「初花肩付」など収集した名物茶器を見せ、また**蘭奢侍（*）**を与えるなどし、宗易、宗久、宗及ら堺の豪商達をもてなした ことなどが記録されている。

（*） 「信長公記」によれば、松永久秀が明け渡した多聞山城を檢分したときに、近くにある東大寺・正倉院から名香木・蘭奢侍を城内に運んで家臣の前で一部を切取ったとされる。

そして茶会記「天王寺屋会記」に、天正10年6月、「上様しやうがひ也、惟任日向守於本能寺御腹ヲキラせ申候」とある。いわゆる**本能寺の変**である。

「今井宗久茶湯書拔」では「今朝於京都 上様 惟日カ為ニ御生害ノ由 友閑老ヨリ申来候」と記載され、「本能寺の変」が松井友閑によって、堺を見物中の徳川家康一行にもたらされたとある。家康は紀伊半島を横断して甲賀経由で伊勢に、そして海路で領地三河国に逃げる。

秀吉の場合は信長政権を引継いだとき、千宗易とともに「茶の湯御政道」も引継ぎ、政権運営に利用した。また、九州攻略や朝鮮半島出兵のための戦費や軍需物資調達に、博多の商人・神屋宗湛らを利用した。茶会記「宗湛日記」のなかに、大坂城で並み居る家臣たちの前で、秀吉が宗湛を特別扱いし、「筑紫の坊主にめしをくわせろ、茶をたつぶりのませせてやれ」ともてなす様子がつぶさに記録されている。このあと博多豪商・神屋宗湛は、秀吉の朝鮮半島戦役の戦費調達や兵站など全面的に協力する。

千宗易を「禁中茶会」の茶堂とするため、大徳寺の古溪和尚（諸説あり）によって得度させ居士号「利休」としたことや、組み立て式の「黄金茶室」を禁中や九州・名護屋城に持ち込んだことなども記録されている。